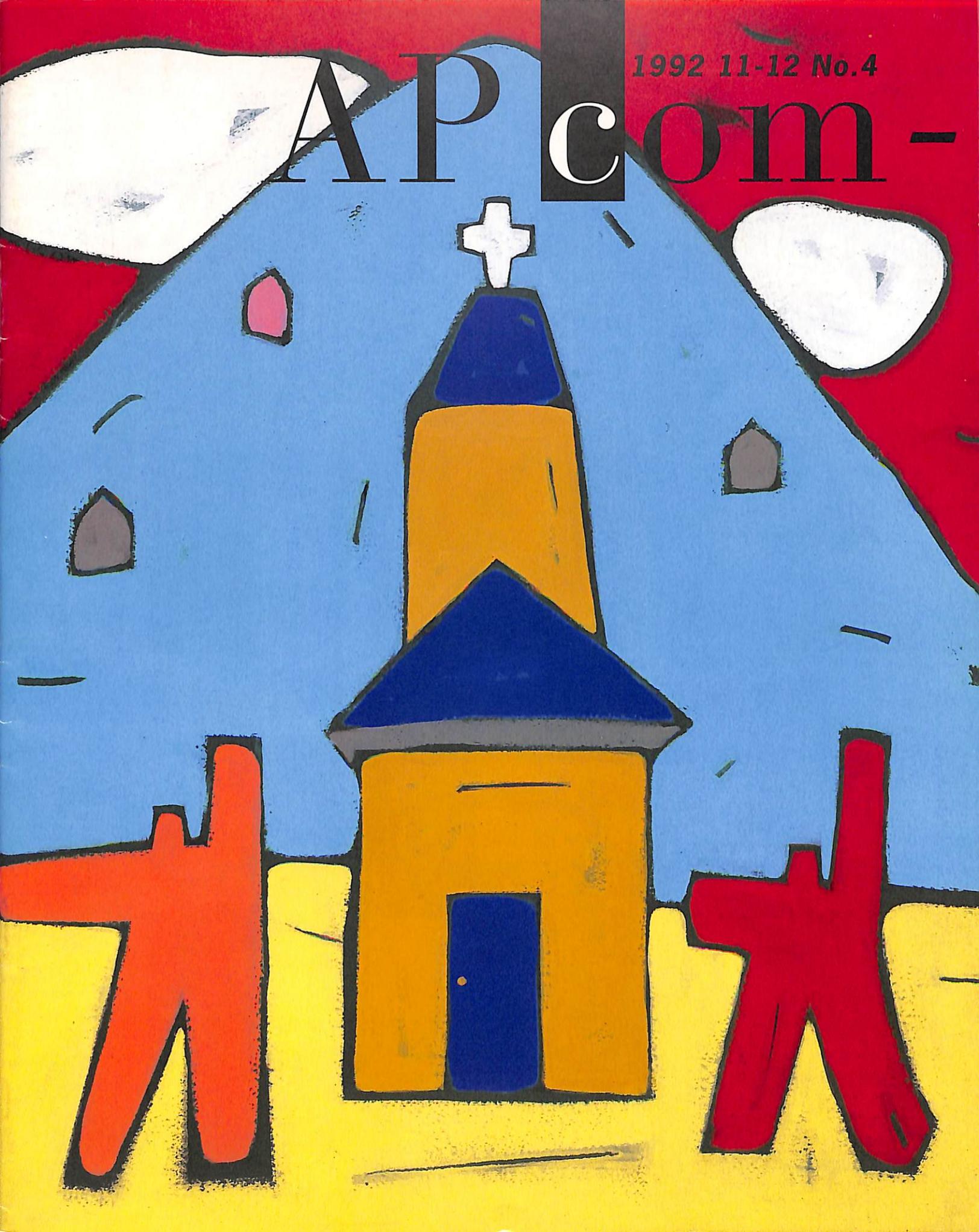


1992 11-12 No.4

# APCOM -



# Santa Fe・Taos

## サンタフェ・タオス プエブロ・スタイル・リバイバル

インディアン、スペイン、メキシコ、アングロサクソンという  
さまざまな文化が混じり合った場所、アメリカ・ニューメキシコ州。  
その交易地であったサンタフェ・タオスは  
エキゾチズムとも表現できる不思議な雰囲気を醸し出し、  
今日まで多くの人々を魅了し続けてきた。  
たとえば、その文化融合の最も豊かな成果は  
プエブロ・スタイルという建築物にあらわれている。

茶褐色の丸みを帯びたアドベ風の壁に木製の突き出した梁という構造。  
サンタフェとタオスの建物は  
そのほとんどがこのプエブロ・スタイルを採用している。  
近代と伝統の交差から生まれたシンプルでスピリット溢れる建築。  
われわれはプエブロ・スタイルを求めて北アメリカ南西部へやってきた。

写真：伊奈英次 文：編集部

### CONTENTS

|  |                           |                         |                             |   |   |   |
|--|---------------------------|-------------------------|-----------------------------|---|---|---|
| AP.com-REPORT<br>世界の建築文化を訪ねて ④<br>サンタフェ・タオス<br>プエブロ・スタイル・リバイバル | エキゾチズムの<br>彼方の土地へ<br>今福龍太 | サンタフェ・タオス<br>ミュージアム・ガイド | サンタフェ・タオスの<br>都市と建築を知るキーワード | AP.com-AREA STUDY<br>販売店のあるまち ④<br>宮城・松島町<br>松島産業株式会社 | AP.com-FORUM<br>ARCHITECTURE VIEW UP<br>ジオラマ舎/<br>オーキッド・コート | INFORMATION<br>新断熱基準のお知らせ/<br>'92住宅設備展開催/<br>住宅用総合カタログ'92-'93刊行 |
| 1  | 11                        | 13                      | 15                          | 17  | 21  | 25  |



住宅の門 サンタフェ市内

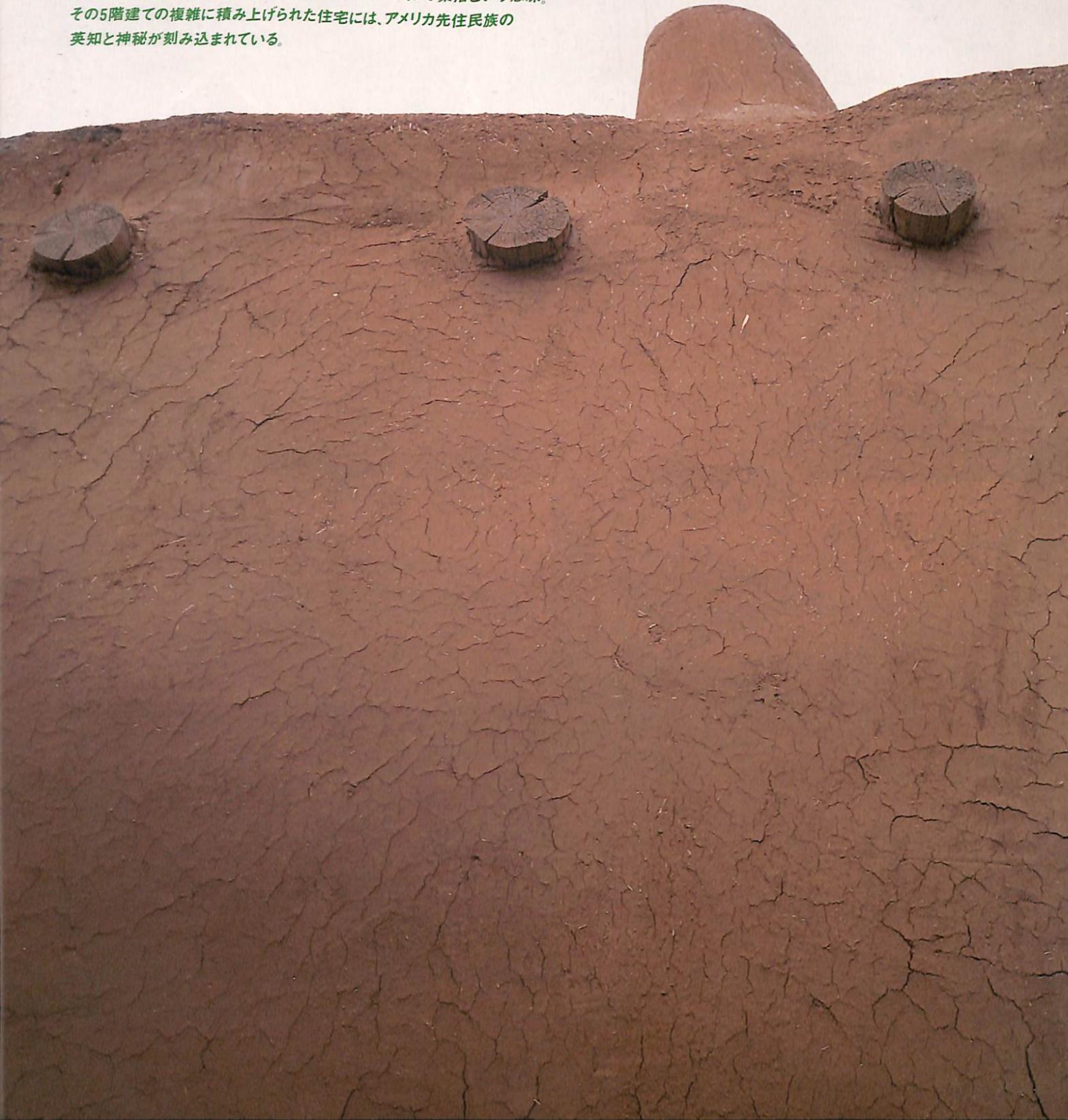


1. ジ・オールディスト・ハウス
2. サン・ミゲル教会
3. 聖フランシス・カテドラル
4. セナ・プラザ
5. ミュージアム・オブ・ファインアーツ

# Taos Pueblo

## アドベの大集合住宅

タオス・プエブロ族。北アメリカの南西部に居住し、狩猟を生活手段とするインディアンの中であって、農耕を行うことによって定住生活を営んできたのがプエブロ族だ。プエブロとはスペイン語で集落という意味。その5階建ての複雑に積み上げられた住宅には、アメリカ先住民族の英知と神秘が刻み込まれている。



1922年ニューメキシコへ初めての旅行を試みた作家D・H・ロレンスは、その後数年間を過ごすことになるタオスを訪れて、後にその印象を次のように綴っている。

「それは私をこの文明の時代、物質的で機械的な発達の大いなる時代から、解放してくれた」ロレンスがそうした印象をもった最も大きなきっかけがタオス・プエブロとの遭遇にあった。事実ロレンスにとって、タオス・プエブロとの出会いはひとつの事件でさえあった。ロレンスは、その昂揚した感情を素直にこう表現しているからだ。

「きらきらと雪の輝く朝、タオスのプエブロへ行き、その屋根の上の白い人影を見よ。人間の意識の太古の根が、私たちのまったく知らぬ深みにまで到達するのを感じることになるだろう」と。

我々はサンタフェの北東130kmにあるタオスへクルマを飛ばした。ロレンスを突き動かしたタオス・プエブロをまず我々も体験してみたかったからである。タオス市街からさらに北へ向かうこと20分、ニューメキシコ最高峰ホイスラーピークを背にして、我々の目指すタオス・プエブロはひっそりとその姿を横たえていた。

タオス・プエブロは、ブルーレイクを源流と

する小川のほとりをはさんで建つ巨大な建造物である。北側が3階建て、南側が5階建てのその建物には、ピーク時には400人以上が暮らしていたというから、かなり大きな集合住宅だ。しかしその巨大さとは裏腹に、威圧感とはまったく感じられない。泥と藁を混ぜてつくったアドベ(干乾しれんが)によるアーシー(地球を感じさせる)な外観が、自然の風景とよくなじんでいるからであろう。

これまで数度にわたって増築・改築されているとはいえ、すでに設営されてから700年がたつと言われている。プエブロの裏側へ回ってみると、ところどころ壁が崩れていて、それがかえってその歴史の長さを無言で伝えているように見える。

タオス・プエブロには現在150人近くが生活している。その1階部分のほとんどは観光客のための土産物屋だ。しかし彼らは、一方でかたくなにその生活様式を守り続けてきた。その精神はあたかもアドベ壁のように、塗り替えられながらも、形そのものは永遠に維持されているというその柔軟さと似ている。

ロレンスに靈感を与えたプエブロの魂の本質とは、案外その泥=アドベそのものに見いだせるのかもしれない。



上：タオス・プエブロ南側住居の外観  
下：2階以上の階へ上がるには、外に設けられたはしごを使用する。外敵からの侵入を防ぐためだ  
前頁：干乾しれんがに塗られた泥塗りの壁と、突きだした梁の対比がおもしろい



# Mabel Dodge Luhan House

## パトロン・メイブルの遺産

文化の沸騰した1920年代、ローリング・トゥエンティーズとも言われた時代に、その震源地であった最先端都市ニューヨークから、南西部の辺境の地へ、ひとりの女性が移り住んできた。その名はメイブル・ルーアン。19世紀末からアーティストたちの関心を引きつけてきたタオスはアメリカのカルチャー・シーンをパトロンージュ(後援)してきたメイブルの登場によってアーティストたちの聖地へと変わっていった。



D・H・ロレンスがタオスへやって来る直接のきっかけをつくったのが、当時ニューヨークやヨーロッパで美術、音楽、学芸のサロンを開いてきたメイブル・ルーアンからの一通の手紙であった。メイブルは雑誌に連載され始めた「海とサルジニア」という小説を読んで、ロレンスにアメリカインディアンの生活を体験させたいと思い招待状を送ったとされている。もっとも、実際にロレンスがタオスへやってきたのは、その手紙から数年たった後であったが、そこがロレンスにとってどれほど重要な場所になったかは最初に述べた通りだ。ロレンスにとってタオスはまさに人生の転機を与える場所となったのである。そのメイブル・ルーアンが暮らした建物が、タオス市街にあった。市街の中心地にあるプラザから5分ほど東へいったところ、市内の喧騒がまだ遠くにこだましているような場所だ。藪蒼とブナやニレが覆い、長いアプロー



チが続く。アドベ風の扉と一体となった木の重厚なとびら。その上には古い大きなベルがぶら下がっている。門をくぐりその前庭に一步踏み込んだとき、その建物は全体像をあらわした。いったいこれをなんと形容すべきであろうか。カメラマンも筆者もしばし沈黙。粘土の塊、あるいは、おもちゃの家? いやそうではなく……、そうだ、これは大きな彫刻だ。まさしくその姿はひとつの家の形をした彫刻であった。タオス・プエブロを真似たアドベ風の壁。その表面はタオス・プエブロのような素朴さはない代わりに、入念につくりこまれていて、繊細なマチエールを感じさせる。極端に誇張された控壁。本来の支持体の役割を離れて、ここでは装飾的な使われ方をしている。彫刻のようなおもむきをつくるのにこの控壁が一役買っているのである。

また、窓の格子のブルーの色が、茶褐色のアドベと微妙な調和を保つ。柱と梁は、タオス・プエブロではその全体の構造に安定感を与えるために太くがっしりとしているが、ここでは意識的にか、逆に細いものが使われている。全体がマッシュヴなアドベ風であるにもかかわらず、不思議と重苦しさを感ぜさせないのはこの細い柱のためであろうか。アドベの質感を演出しながら、しかし、徹底的に冒険しようというつくり手の意志が強くあらわれた建物だ。メイブルの存在がタオスに新しい時代をもたらしたように、実はこの実験的な住宅メイブル邸がきっかけとなって、いわゆるプエブロ・スタイル・リバイバルがタオスに起こったのであった。



上: 入り口裏側食堂。白い漆喰を使って壁にめりはりを与える  
下: アドベ風の扉と門、奥に鳥小屋が見える  
前頁: 誇張された控壁が彫刻的な表情をつくりだす。入り口付近



# Mabel Dodge Luhan House



上：ルミナ・ギャラリー2階の屋根つきルーフ・バルコニー  
下：玄関。スペイン・コロニアルスタイルの典型

メイブルがタオスにやってきたのは1917年であった。そこでメイブルはインディアンのアントニオ・ルーアンと四度目の結婚をした。メイブルは18世紀に建てられたプエブロスタイルの建物に大幅に手を入れて、自分たちが住み、またアーティストを招待するための部屋と別宅をもつ複合施設をつくることを考えた。こうして1922年に完成したのが、メイブル邸である。

全体のフォルムは有機的で、かどは曲線を用いて丸みを帯びている。彫刻的な印象は、こうした有機的で流体的なかたちからくるものである。確かにプエブロスタイルをベースにしていることは明らかであるが、一貫した流れるようなフォルムは、新しくメイブルによってつけ加えられたものであろう。

部屋の内部は、スペイン・コロニアルスタイル。10数部屋ある中でも圧巻は、3階のペント・ハウス部分だ。360度見渡せるガラス窓からは、遠く連なるニューメキシコの山岳地帯が見える。

メイブルはこの自邸に、D・H・ロレンスをはじめ、画家ジョージア・オキーフ、思想家オルダス・ハクスリー、写真家アンセル・アダムス、精神分析家C・G・ユングらを招いたという。2階のバス・ルームの窓には、ロレンスが描いたペンキ絵が残されている。

メイブル邸は映画作家・俳優のデニス・ホッパーによって買い取られた後、現在では「メイブル・ドッジ・ルーアン・ハウス」という宿泊施設として開放されている。



メイブル邸ディテール



メイブル邸ディテール



ロレンスのペンキ絵が美しいバス・ルーム



メイブルズ・スイート・ルームと名づけられた3階の部屋



リビング・ルーム。角につくられたアドベ風の暖炉、小屋梁に支えられた天井部分



メイブル邸ディテール



# Pueblo Style Revival

## サウス・ウェストの表情

北アメリカ南西部といえば乾燥した砂漠地帯をイメージするが、サンタフェ・タオスは、山岳地帯が近いゆえに、四季もあって変化に富む。プエブロ・スタイルのその柔らかな肌合いは、そうした穏やかな気候と相まってまるで大地の一部のように見える。



地球の素材である土がつくりだした建物。プエブロ・スタイルとは、大地が建築というかたちに変容したにすぎないかもしれない。少なくとも、タオス・プエブロで目にしたように、アドベ壁が崩れて地面と一体になっていた部分を見れば、それは歴然としている。それは単に土へ帰帰しただけなのだ。サンタフェ・ダウンタウンは、近年プエブロ・スタイルによる建築規制を行ってきた。高層建築もなく、まち全体がまるで大地にはりついているようにさえ見える。建築批評家C・ジェンクスは「ポスト・モダンの建築言語」で、その一つに環境、地域という文脈への配慮ということを行っているが、サンタフェのまちはまさしくその典型であり、それがまたこれほど成功している例も珍しいのではなからうか。ところで、これまでプエブロ・スタイルという言葉を使ってきたが、実はこの定義ははっきりしていない。しいて言えば、低層の平屋根をもち、不定形な壁に、丸みを帯びた輪郭



プエブロ・スタイルの住宅のさまざまな開口部

の建物というくらいの意味らしい。だから純粹なアドベの壁である必要はなく、むしろそのアドベが性質上必然的にもつ流体的な構造が踏襲されればよいということになる。新しく建てられたプエブロ・スタイルの建物は、コンクリートのものも少なくない。しかし、外観はあくまでアドベ風であるし、おそらくインテリアも随所にスパニッシュ・スタイルが引用されているに違いない。この悪く言えばルーズな、よく言えば柔軟な態度は、どこから来たものなのか。北アメリカにおける先住民との現在まで続く長い抗争の歴史は、表面的にはインディアンの撤退、妥協、屈辱の歴史であった。インディアンが先住民としての意志表示を公的になかたちで言い出せるような環境が生まれてきたのさえ、ほんのここ数十年のことである。そうした北アメリカの民族間の争いを考えるとき、サンタフェ・タオスという場所の置かれている位置、またそこで生まれてきたプエ

ブロ・スタイルは、ある意味で建築デザインという領域を越えて、ひとつの重要な手掛かりを示唆しているように思える。厳格な建築言語をもたないこと。しょせんは土からできていて、最後は土に帰るもの。この単純にして明解な解が示すことこそ、プエブロ・スタイルの教えるところである。あるときは泥のように柔らかくなり、またあるときは土壁のように堅くなる。サンタフェ・タオスのアドベあるいはプエブロ・スタイル。それは、建築という比喩を越えてインディアンのスピリットそのものを提示していると言えるのではなからうか。

参考文献：Sandra & Laurel Seth *ADOBE!*, Architectural Book Publishing Company 1988, Michael Durham *The Smithsonian Guide To Historic America "The Desert States"* Stewart Tabon & Chang 1990, 『アメリカ先住民のすまい』L・H・モーガン 古代社会研究会訳、岩波文庫 1990, 『アメリカ建築案内』東京大学建築学科 香山研究室編、工業調査会 1989、

前頁：メイプル郡近くのプエブロ・スタイルの現代住宅

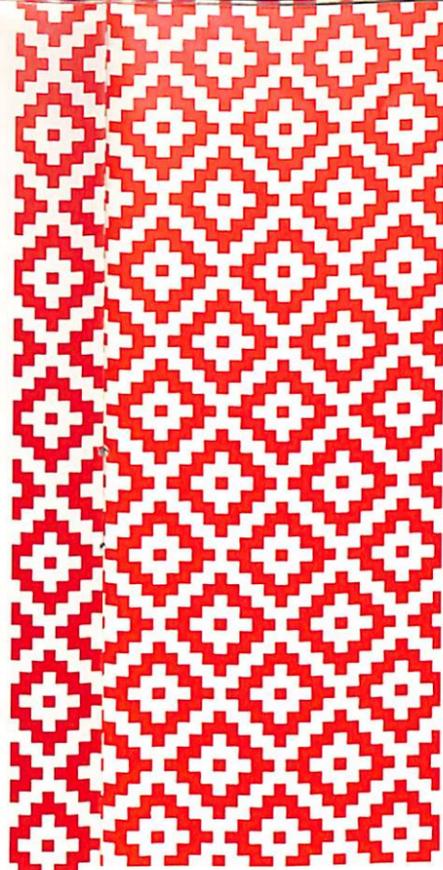
# エキゾティシズムの彼方の土地へ

今福龍太

現代のわたしたちが、アメリカ南西部サウスウエストの、とりわけ、サンタフェ、タオス一帯を旅することは、ある意味ではとても怖い行為だ。なぜなら、私たち自身の知覚の構造を知らぬままにつくりあげてきた一種の近代的「エキゾティシズム」の質が、この野生の土地に身を置くことで、すっかり暴きだされてしまう可能性があるからだ。私たちが旅に駆り立てられ、壮大な自然の造形に感動し、奇妙な土地の風習に魅了され、新鮮なローカル・デザインやネイティブ・アートに惹かれてゆく意識の構造が、実は意外に、近代人のきわめて限定されたエキゾチシズムに由来するものであったことを、サンタフェへの旅は白日のもとにさらしてしまうのだ。

そもそも、サンタフェが観光地として脚光を浴びたのは、19世紀末に開通したサンタフェ鉄道によって、アメリカ東部とサウスウエストが直接結ばれたことによる。1920年代になって、当時ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジあたりをたまり場として前衛的なサロン文化をつくりあげていた作家やアーティストたちは、こぞって南西部のインディアン文化の香りあふれる土地への文化的巡礼行へと赴いた。機械文明や機能主義的デザインが都市のモダニズム的感性を牽引しつつあったこのとき、南西部のインディアン文化の神秘と寡黙は、近代人のアヴァンギャルドで動的な美意識に一種の調和を呼び込む静かな力を擁していたのだ。サンタフェやタオスは、その意味で、アメリカにおいてふたたび見出された「野生」の土地

だった。だがもちろんそこで見出されたプロ・インディアンたちは、かつての征服者たちが出会い、戦い、殺戮していった18~9世紀までの「野蛮」な原住民ではなかった。それはむしろ、都会人のモダニズムの意識の中で再創造された、ロマンティックでエキゾティックな「他者」たちとしてそこに配属されたのだった。2~30年代のニューヨーク・サロン文化の中心人物であり、タオス近郊に住んでさまざまな芸術家のパトロン的存在となったメイベル・ルーアンや、ホビ族やズニ族の神像であるカチーナ人形を徹底的に収集するために、南西部へと移り住んでしまったシュルレアリスト、マックス・エルンストなどが、すぐに思いあたる。彼らにとって、インディアン文化はまずなによりも、プリミティブな神秘の力を内蔵していると見えることによって、彼らのアート意識を刺激したのだった。インディアンたちのそうしたイメージが、20世紀アメリカのポピュラー・カルチャーのなかに流れ込んでくる過程で重要な役割を果たしたのが、写真だった。20世紀初頭にエドワード・カーティスやケート・コリーといった先駆的な写真家によって撮影された南西部のインディアン文化の写実的な映像は、この地域の原住民文化の豊饒性をはじめて可視的に人々に訴える、見事なできばえを示していた。その後、写真というメディアはつねに南西部の文化をその時代時代のアーティストックな感性へとつなげる、媒介者的な立場を貫いてきた。エドワード・ウエトン、ポール・ストランド、アンセル・アダムスらによる圧倒



的な自然景観を撮り取めた作品は、ジョージ・ア・オキーフの絵画作品とこだましながら、近代人が砂漠の人跡未踏の自然を、自己内部をえぐり出すための貴重な媒体として再認識してゆく過程を示している。しかし近年のリチャード・ミズラックやダグラス・ケント・ホールといった写真家たちが写しだす南西部の土地の映像は、インディアンのテリトリーであった荒野に近代文明が侵入した奇妙な痕跡を撮りおさえることによって、モダニズム文化が再発見した「野生」の土地が、いつのまにかポストモダニズム的感性のなかで、文明そのものの終末を透視するような黙示録的景観へと変容しつつあることを語っている。アメリカ南西部の写真史を追うことで、私たちは20世紀のエキゾティシズムにかかわる精神史の一幕を探りあてることが可能なのだ。サンタフェやタオスを今日訪れる私たちが、まず褐色の砂漠やメサ(台地)の連なりに驚嘆し、やがて博物館でインディアン・アートの輝きにうたれてゆくことは、だから20世紀のモダニストの中を流れていった精神史そのものを歩き直しているのだ、ともいえる。しかし現在のサンタフェのプラザを訪ねてインディアンの老人からターコイズのアクセサリーを購入し、タオス・プエブロ(集落)に行くと優雅なアドーベ造りの集合住居を眺める私たちは、きっとそこに単純な近代人のエキゾティシズムを投影することがもはやほとんど不可能であることを実感せざるを得ない。広場の回廊を占拠するインディアンたちは、ときに生活意欲を失いかけたただの土産物商にも

見えるし、オキーフやウエトンを魅了した褐色の台地には、いまやウラン採掘の爪跡が痛々しく刻まれていたりする。だがなおも、この土地にはかぎりない美の源泉があることをだれも否定できない。むしろ20世紀のエキゾティックな感性が破産するまさにその地点から、いまこの土地と人々の新たな意味がつくられ始めているのだ。タオスに住み、ローカルな人と自然の真摯な観察者としての叡知をこめて創作をつづける『ミラグロ豆畑戦争』のジョン・ニコルズ。南西部のフォークロアを英語とスペイン語の不思議なバイリンガリズムの感性のなかで生き生きと描きだすエッセイスト、ジム・ケイゼル。新作『アルブルケルケ』でこの土地にはぐくまれてきたメキシコ人の揺れる魂の軌跡を活写したチカーノ作家、ルドルフォ・アナーヤ。そして、瓢箪というかたち定まらぬ素材を使って、そこにチカーノとインディアンの共有する聖なるアイコンを刻み込みつづけるアーティスト、ロベルト・リベラ……。だから私たちの旅は、サンタフェやタオスへの遍歴をつうじて、こうした南西部のあたらしい美の創作者たちがいま見つけているものを発見してゆく旅であらねばならない。少なくとも私は、ルーアンや、オキーフや、ウエトンの幻影のなかをくぐり抜けて、その彼方に立ち上がりかける曙光の景観をしばらくは探りつづけてみようと思う。

(いまふくりゅうた／中部大学教授・文化人類学専攻)



## ● ファインアーツ美術館

The Santa Fe Museum of Fine Arts

1917年にラップ・アンド・ラップ・コロラド商会によって設計されたこの美術館は、サンタフェで最初にプエブロ・スタイルを復活させた建物である。外観は、1915年にサンディエゴで開催されたパナマ・カリフォルニア博覧会にニューメキシコ館として建造された建物を模して、特にその塔の部分、アコマの伝道教会をベースに周辺のスパニッシュ・スタイルの教会からデザイン・エッセンスを引用している。収蔵作品は、ニューメキシコおよびその周



2階バルコニーに展示されている彫刻

辺に住むアーティストの絵画、彫刻など8,000点あまり。とりわけサンタフェに在住するアーティストを意識的に紹介しようと、その展示スペースには特別な配慮がなされている。この考えは20世紀初頭に活躍したアーティスト、ロバート・ヘンリー、ジョン・スローンの考えを取り入れたもので、後にタオス芸術家協会を結成したジョゼフ・ヘンリー・シャープ、アーネスト・ブルーメンシャインらの作品、またアメリカ南部とニューヨークを行き来しながら風景、自然に独自の解釈を与えた女性作家ジョージア・オキーフの作品が展示されて



ファインアーツ美術館中庭

いる。

サンタフェが今日アーティストックなまちとして脚光を浴びているとしたら、その一端をこの美術館が担っていると言えるだろう。

開館時間：1～2月 火～日曜日  
10:00～17:00  
3～12月 毎日10:00～17:00

料金：南西部の現代美術、伝統美術、他の地方のアメリカン・アートと展示が分かれていて、合計12.6ドル(約1540円)

※1ドル=122円で計算



ジョージア・オキーフ「青い川」(1935)

## ● 国際民俗美術博物館

The Museum of International Folk Art

ダウンタウンの南東 [タクシーで10分位] の山間部の麓には三つの博物館／美術館が並んで建っている。これはその一つ。

この種の博物館としては世界最大規模を誇る。開館は1953年。100数か国から12万5千点におよぶ作品が集められている。なかでも建築家アレクサンダー・ジラードが妻と収集した世界のミニチュア人形、おもちゃのコレクションであるジラード・コレクションのコーナーは特に有名。世界の民族その風俗・習慣をその土地でつくられている人形を使ってジオラマ風に展示してある様は圧巻。大人でも十分楽しめる。他には、ヒスパニックの民芸、玩具、民族衣装の常設展示、綿密なフィールド・ワークによって集められたメキシコの祭り、儀式のための民族資料、さらに91年からは、



「民俗工芸は世界の人々をつなぎとめる」というスローガンの書かれた国際民俗美術博物館入り口

今日のトルコの伝統美術といったコーナーもオープンした。

開館時間：1～2月 火～日曜日  
10:00～17:00  
3～12月 毎日10:00～17:00  
料金：12.6ドル(約1540円)

## ● インディアン・アート・アンド・カルチャー博物館

The Museum of Indian Arts and Culture

三つの博物館／美術館の一つ。プエブロ、ナバホ、アパッチなどのインディアンの美術、文化を紹介するために1987年にオープンした。収蔵品には1931年に創立したニューメキシコ州立人類学研究所の

コレクションがあり、南西部インディアンの陶器、ジュエリー、織物などが一般公開されている。

取材した今年5月には、「from this earth」と題して現代の南西部の陶器350点あまりがアトリウムに展示されていて壮観だった。またインディアン自身による演奏やパフォーマンス、子供のためのワークショップなども企画されている。

開館時間：1～2月 火～日曜日  
10:00～17:00  
3～12月 毎日10:00～17:00  
料金：12.6ドル(約1540円)



インディアン・アート・アンド・カルチャー博物館外観

## ● アメリカインディアン・ホイールライト博物館 Wheelwright Museum of The American Indian

1937年にナバホ・インディアンの保護と研究を目的に建てられた私設の博物館。建物の外観は、ナバホの魂を表現した形態だと言われている。

マリー・ホイールライトによって収集されたナバホのコレクションが中心だが、現在ではナバホに限らず全米のさまざまなインディアンの伝統美術、ジュエリーなどが展示されている。

しかし、なんとといってもこの博物館の見どころはやはりナバホのコレクション。特に



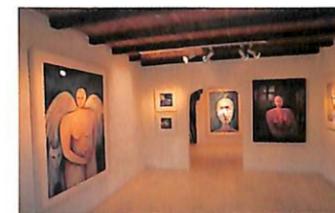
ナバホ・インディアンの砂絵を真似た織物 (1890年代)

儀式の際に描かれる砂絵(儀式では儀式終了とともに壊されるので残らない)をあらわした彩色画、織物はみごとだ。取材時にも、この彩色画が展示の中心になっていた。また、地下にはミュージアム・ショップがあり、ナバホの絵画や歌、音楽テープなどのさまざまな資料が展示・販売されている。

開館時間：月～土曜日 10:00～17:00  
日曜日 13:00～17:00  
ただし、展示品入れ替えのために休館する可能性がある  
料金：任意に来館者が自主的に寄付をする

## ● キャニオン・ロード

ダウン・タウンの北東部に位置する3kmほどの細長い道がキャニオン・ロードで、



キャニオン・ロードのギャラリーの一つ「Tatan Pony Gallery」Carole Iarochéのようにプライベート・ギャラリーを持つ作家も多い

ニューヨークに次ぐアート・ゾーンと言われているほどギャラリーが集中している。その多くは、アンティーク・ショップであったり伝統的なニューメキシコの美術品を展示しただけのギャラリーであるが、なかにはサンタフェ在住の若いアーティストをプッシュする意欲的なギャラリーもある。

## ● タオスのギャラリー

タオスにもサンタフェ同様にたくさんのギャラリーがあるが、ここではメイプル・ルーアン邸の敷地に併設されているルミナ・ギャラリーを紹介しよう。



ルミナ・ギャラリーの内部

ルミナ・ギャラリーは1930年代にメイプル邸内に建てられたアメリカの画家ビクター・ヒギンス邸をリフォームして1991年にオープンした新しいギャラリーだ。とはいえ、ここが注目される理由はアメリカ風景写真の巨匠アンセル・アダムスに学んだ写真家チャック・ヘニングセンのプライベート・ギャラリーであり、また、タオスおよび周辺のアーティストや写真家を精力的にバックアップしているところにある。ヘニングセンの他にアンセル・アダムス、ウォルター・シャペリのオリジナル・プリント、ロン・クーパー、ポール・パカレリの絵画、立体作品が展示されている。

## ■ アドベ風の現代建築

サンタフェのダウNTOWN地区は、どの建物もみなアドベ風の茶褐色の土色をしている。その一種独特な色合いが、サンタフェというまちのカラーになり、現代感覚あふれるアーティスティックな観光地でありながらも、エキゾチックでノスタルジックな雰囲気を醸し出している。

というのも、実はダウNTOWN地区には、1957年に施行された法律によって厳しい建築規制がかけられているのである。その法律というのは、もともとこの地域に生活していたプエブロ・インディアンの建築スタ



サンタフェ・ダウNTOWN



小学校もアドベ風

イルか、もしくはその後入植してきたスペイン風の建築スタイルを踏襲した建築以外は建てられないというものだ。

もちろん純粋なアドベを現代建築に応用することは難しいので、あくまでもそれ風な建築にならざるを得ないわけだが、それでもこの規制によりまちなみに統一感が与えられて、サンタフェのダウNTOWNをより魅力あるものにしているのである。

## ■ アドベ建築

土、藁、水を混ぜ合わせ粘土にしたものを木型などを使ってれんがが状にし、数日かけ

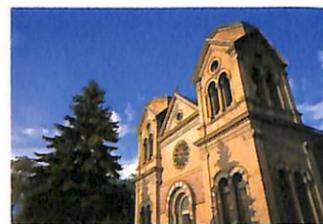


タオス・プエブロの住居ディテール

て天日および日陰干しにする。それを交互に積み上げていくだけの単純な構造。写真では梁と桁が見える。また、外装表面部には、同様に土、藁、水を混ぜ合わせ粘土にした(泥漆喰)を塗る。

## ■ 聖フランシス・カテドラル

サンタフェ最初の司教フランス人ジャン・バプティスト・レイミーによって1869～89年にかけて建てられたこの地域では珍しいロマネスク様式の教会。もともとこの場所には教会があったが、1680年のプエブロ・インディアンの抗争により一度破壊された後に再建されたと言われている。教会に隣接した礼拝堂には、メキシコから移設されたと言われるアメリカで最古の小さな聖母像が置かれている。また教会入り



上：夕映えに輝く聖フランシス・カテドラル  
下：大司教レイミーのブロンズ像

口には大司教レイミーのブロンズ像がある。ウィリアム・カーターの「Death Comes for the Archbishop」はこの教会と大司教レイミーがモデル。

## ■ ジ・オールディスト・ハウス

13世紀頃プエブロ・インディアンによって基礎部分がつくられたとされており、アメリカに現存するものでは最も古い家であることからこのように呼ばれているが、詳細は不明。1750年に一部増築されたという記録が残されているが、古い部分の壁は泥漆喰が使われていて、プエブロ・スタイルの



ジ・オールディスト・ハウスの入り口

原型をよく残している。

現在入り口は、ギフトショップになっているため、うっかりすると見過ごしてしまう。

## ■ チマーヨーの礼拝堂

チマーヨーはニューメキシコの東部の開拓地にあたり、18世紀まで犯罪者の流刑地でもあった。この地に1814年建てられた教会がチマーヨーの礼拝堂だ。低く抑えられた



周囲の環境と調和したその姿は、素朴だがとてもかわいらしい

開口部、量塊のあるアドベ、それとは対照的な木造の切妻壁など、当時の雰囲気をよく伝えている。

入り口前には、墓と十字架が置かれているが、この十字架は死を覚悟するような病に倒れたDon Berrado Abeytaという建築家が、回復とともに啓示を受けて現在ある場所から掘り起こしたものと言えられているが、真偽のほどは分からない。

## ■ サン・フランシスコ伝道教会

1772年に建てられたこの教会は、正面から見る限り一見他のスパニッシュ・バロック



重量感溢れるマッシュヴな形態はさながら抽象彫刻

のものと変わらない。しかし、この真骨頂は実は裏側にある。

分厚いアドベとそれ自体彫刻的造形とも言えるマッシュヴな控壁によって構成されたその姿は見るものを圧倒してやまない。それはまるで一個の巨大な抽象彫刻を思わせる。ありふれたファサード・デザインと裏側のこの異様ともいえるアンバランスが、ジョージ・オキーフらタオスを拠点に活動した多くのアーティストや写真家たちを魅了し、繰り返し作品に描かれ続けてきた理由であることもうなづける。

外壁のアドベは、プエブロ・インディアンのやり方である泥と藁を混ぜ合わせただけのもの。強い日差しにさらされているとひび割れが起こるらしく、毎年塗り替えられているという。

## ■ サン・ミゲル教会

スペインの入植者の召使いとしてこの地にやってきたトラキシカル・インディアンによって1636年に建てられたもので、現存す



サン・ミゲル教会の正面  
内部にはスペインとプエブロ・インディアンの両方のスタイルで描かれたたくさんの装飾がある

るキリスト教会としては最古のもの。1680年のプエブロ・インディアンとの抗争によってその大部分は破壊されたが、壁面部分は当時のままだ。塔の部分は1870年に増築された。

祭壇背後の飾り壁は、中央部分のサン・ミゲル像を配置するために、1748年につくられたとされている。大司教レイミーによってこの地にもたらされたキリスト教は19世紀以降この教会を拠点に活動した。

## ■ セナ・プラザ

1867年に戦争の報奨で手に入れたセナ少佐の住居。1927年にサンタフェに寄贈されて現在一般に公開されている。19世紀サンタフェのダウNTOWNの様子をよく残している建物のひとつ。



中庭が美しいセナ・プラザ

## ■ 屋外劇場

パウロ・ソレリが残している数少ない実施作品のひとつ。盛り土した敷地に、すり鉢状に谷底へ沈んだような造形は目を見張るものがある。また、アーチをクロスさせたステージ屋根、巨大な迷路のような不定形のアプローチ、ステージ後方の築山といい、どれもこれまで目にした劇場とは著しく異なった形態をしている。

ソレリ自身は満足のいくデザインではなかったと後に述懐しているが、プエブロ・インディアンの住居様式をデザインとしてだけでなく、理念として採用しようという意欲が感じられる作品だ。



上：甲虫を想像させるステージ部分  
下：壘場のようなアプローチ部分

## ■ リオ・グランデ川

アメリカ合衆国南西部とメキシコとの国境をなす国際河川。コロラド州サン・フォン山脈に発しニュー・メキシコ州を南流し、テキサス州西端のエル・パソ以下は両国の国境をなす。サンタフェ・タオスはともにリオ・グランデ川沿岸に開けた観光都市である。



サンタフェとタオスを結ぶルート68沿いを流れるリオ・グランデ川